

「仏教入門講座－釈尊伝－」4/4

古代インドに王子として生まれた釈尊は何に悩み、何を考え、何を悟ったのか？

1. 涅槃／80 歳

●最後の旅

マガダ国→ヴァイシャーリー→クシナガラ

あらゆるものは、うつろいやすいものである。怠ることなく精進しなさい。これより三カ月ののち、如来は涅槃に入るであろう。 (『マハーパリニッパーナ・スッタタ』より)

・涅槃(ねはん) nirvana ニルヴァーナの音写、^{ないおん}泥洹とも。滅、寂、寂滅、滅度などと訳す。

吹き消すこと、吹き消した状態をあらわし、燃えさかる煩悩の火を滅尽して、さとり智慧即ち菩提を完成した境地いう。仏教の究極的な実践目的である。

また、般涅槃(はつねはん)、大般涅槃(だいはつねはん)ともいう。

鍛冶屋チュンダの供養……クシナガラの沙羅林で最後の説法

●自灯明・法灯明

阿難よ、悲しむな。愛しいものであっても、すべて別れなければならないものである。おまえはよく仕えてくれた。努め励んで修行せよ。この世で自らを灯明とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を灯明とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ。

もう教えるべきことはすべて語り終えた。 (『マハーパリニッパーナスッタタ』より)

自灯明とは他(外)に原因を求めないこと。

Cf.清澤満之「生のみが我等にあらず死も亦我等なり」

法灯明とは人師に依存しないこと。

●涅槃会 2月15日

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。奢れる人も久からず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵におなじ。 『平家物語』

道俗男女預参し 卿上雲客群集す 頭北面西右脇にて 如来涅槃の儀をまもる 『高僧和讃』源空讃

ねがはくは花の下にて春しなん そのきさらぎの望月のころ (西行法師)

